

関係性を通して進める発達障碍児の理解

小林隆児^{*,**}, 大久保久美代^{**}

I ある幼児に見られた気になる行動から

ある保育園の園長から4歳の男児（A男）について相談を受けた。いつもどことなく落ち着かず、集団で活動している時にひとり園庭に出て遊んだり、時折唐突に脈絡のないことを言ったり、衝動的に他児を叩いたりするということがあった。

早速、筆者らの臨床実践の場である Mother-Infant Unit (MIU) (小林, 2000) で診ることになった。なお、事例の記述に際してその匿名性を保つために細部について改変していることを断っておく。

最初に挨拶を交わした後、筆者は母親とA男の様子について話し合っていた。担当のスタッフ（共同援助者）はA男と自由に遊ぼうと相手をしていたが、彼は二人の話が気になって仕方がないのか、遊びに気が乗らない様子である。母親は筆者との話になり、次第に真剣な雰囲気を選び始めた時であった。突然彼は話し合っている二人のところに近づいて、ソファの上に置かれていた母親の手提げ鞆の中

から素早く鍵束を取り出した。二人の話は中断し、彼の方にみんなの注意が注がれたが、彼はわざとらしく鍵束を持ったまま、走り始めた。A男はことさら鍵束を振り回しては母親から注意してもらいたい様子であった。母親がダメでしょと禁止のことばを発して鍵束を取り上げると、それ以上には鍵束を取り返そうとはしなかった。しかし、しばらくして今度は鞆を取って走り出そうとした。……終わり頃になってふたたび筆者と母親が話し合っていると、今度は突然母に向かって「うんち！」と言いながら部屋の外に出ようとした。それを聞いて母親は、「本当にうんちしたいのね」と疑いながら一緒にトイレに行ってみると、実際には排便しなかったのではなかった。それがわかった母親は「嘘だったのね！」と叱るような口調で応答するのだった。

ここに示されたA男の行動は通常、前者が「挑発行動」、後者は「虚言」と言われているものである。問題行動としてよく取り上げられ、療育や保育の現場で対処に苦慮することの多いものである。A男にはこのような気になる行動が日常生活の中でも頻繁に出現していたのである。

Understanding of Developmental Disorders in the Viewpoint of Relationship

* 東海大学健康科学部, Ryuji Kobayashi : Tokai University School of Health Sciences

** 狛江のんびりクリニック, Kumiyo Okubo : Komae Nonbiri Clinic

II 発達歴からわかったこと

乳児期特に気になることはなかったが、1歳半頃、それまで発していたいくつかの単語を話さなくなりました。数週間経つと再び発語を始めたが、言葉の遅れが次第に目立つようになった。そして、この頃からひとり勝手に行動することが増え、落ち着きもなくなってきた。3歳時、某子どもセンターで発達の遅れと自閉的傾向を指摘されている。

生後8カ月時、A男は難病にかかり、治療のために1日のうち数時間安静を強いられるようになった。そのため、親がA男をきつく抱き続け、時には物理的に身体を拘束せざるをえないこともあったという。過去にこのような特殊な事情があったことが母親の話から明らかになったが、母子間の愛着形成においてきわめて重要な時期であったことを考えると、親子共々非常に辛い年月であったろうと想像されるのだった。しかし、教師で知的な印象を与えた母親は当時のつらかった感情や悲しみを表に出すことはなく、淡々と語り続けていたことに、筆者はある種の戸惑いを感じていた。

III 母と子の遊びに見られた コミュニケーションの特徴

セッションの開始からしばらくして、母親と筆者の話が終わり、母親にA男と自由に遊んでもらうことにした。A男はままごとセットを手に取り、〈お買い物〉と言いながら立ち上がり、どこかに出かけたようにしていた。母親もいろんな野菜や果物などを手当たり次第に手にとっては説明しながらA男に差し出すのだが、A男はそんな母親の誘いにはさほどうれしそうな反応を示さず、どこか他のことをしたような様子である。しかし、筆者にも何をしたいのか判然とつかめない。母親はさらに物を次々に取り出しては、〈〇〇は100円、これはいくら〉などとA男と一緒に買い物をしようとしていた。そんな中でA男は時折、両足をつま先立てて、両手を羽ばたくように小刻みに動かすという奇妙な行動を起していた。

母親は子どもが何をしようとしているかに気を配るゆとりはなく、なんとか楽しませようと懸命になって遊びにつき合うのだが、楽しい雰囲気は生まれにくい。A男の常同行動は、自分の意が伝わらないための苛立たしさから来ているようにも見えるのであった。

IV 新奇場面法を通して見えてくるもの

ここに認められる母子関係の特徴をより明確にするための枠組みとして新奇場面法 (Strange Situation Procedure; SSP) (Ainsworth et al, 1978) (図1) を、われわれは最初のセッションで実施している (小林, 印刷中)。そこで特に取り上げたいのは、母親との分離とその後の再会時の反応である。

- ④ 母親と stranger (ST) がA男とともに過ごした後に、母親がA男に向かって、〈ちょっと出てくるね。すぐにもどってくるからね〉と言って部屋を出た。A男は少し戸惑った様子を垣間見せたが、〈うん〉と一応頷いて遊びを続ける。しかし、母親が部屋を出た途端に落ち着かなくなり、今やっていた遊びを放り出して歩き始め、そばに積んであったブロックの方に登ろうとする。しかし、ぎこちない歩みだったこともあって、躓いてしまい、膝小僧を強く打ちつけてしまった。ソフトブロックではあったが、明らかに痛そうであった。足を引きずりながら打ちつけた箇所を手で触っているが、まったく痛そうな声を出すこともなく、STに助けを求めることもない。その後も落ち着かず、何をしてもすぐに目移りして集中しない状態が続く。
- ⑤ まもなく母親が入室。すぐに母親の姿を目にして、一瞬うれしそうな表情を見せるが、それもすぐに引いてしまい、それ以上母親に寄っていくこともなければ、母親をずっと注目することもない。代わって部屋を出ようとするSTの後ろ姿をずっと目で追いかけているのが印象的であった。
- ⑥ 3分後、母親が〈またちょっと出かけてくるね、すぐに戻るから待っててね〉と言いながら部屋を出て行く。A男は先ほどと同じように〈うん〉と頷くが、母親が部屋を出ていき、ひとりぼっちに

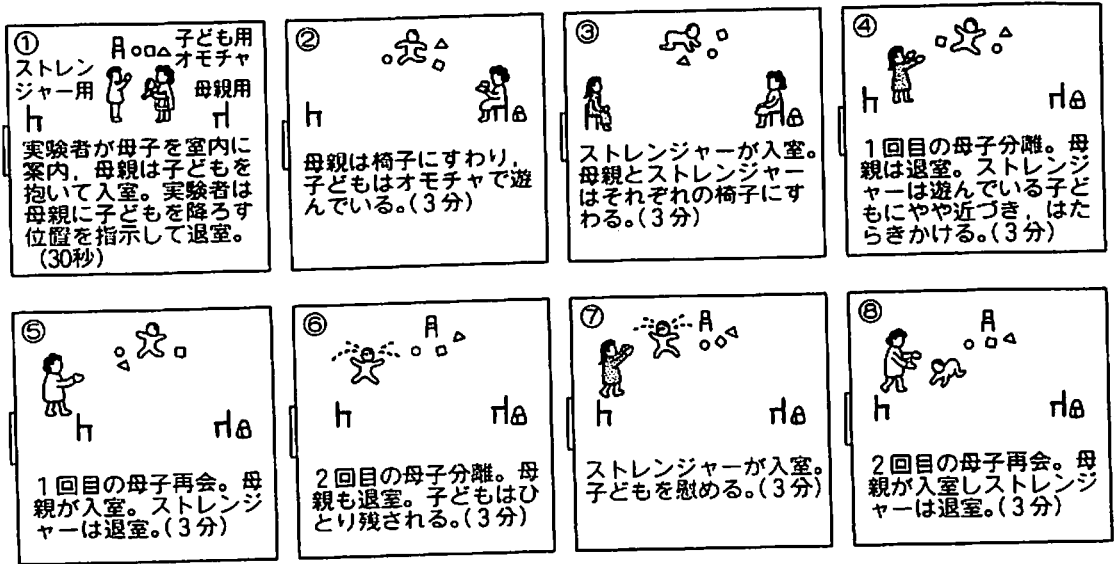


図1 新奇場面法

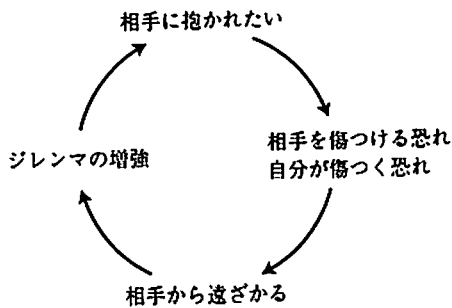


図2 関係欲求をめぐるアンビバレンス

よと言うように頷いている。しかし、母親の不在にA男の気持ちは明らかに動揺を来し、落ちつきなく動き回っている。痛い思いもしたであろうと思われるにもかかわらず、痛みを訴えたり、助けを求めたりすることもない。A男の心細さが伝わってくるが、そんな時にも自分から助けを求めようとしない。

V 関係欲求をめぐるアンビバレンス

なった途端に、A男の様子は一変し、非常に警戒的になり、じっと身を潜めるようにしながらあたりの様子をうかがっている。しばらくの間ほとんど身動きすることもなく、時折ビデオカメラの動く音に注意を向けているくらいで、遊びはまったく手に着かなくなった。

- ⑦ 3分後 ST が入室すると、それまでの全身に充ち満ちていた緊張感は多少薄らぎ、ままたごを再び始めるようになった。
- ⑧ 3分後、母親が再入室すると、ちらっと母親の方を見たが、先ほどと同じように、退室しようする ST の後ろ姿をじっと最後まで目で追っているのだった。

母親が退室する際に、母親が声を掛けると、A男は戸惑いの表情を見せながらも口では大丈夫だ

筆者は SSP で認められた A 男の心的状態を関係欲求をめぐるアンビバレンスとして概念化している。母親に相手をしてもらい、かまってもらいたいという欲求（関係欲求）があるにもかかわらず、いざ相手をされるとなぜか回避的な反応を起こしてしまい、両者の間で積極的な関わり合いが生まれず、その結果両者の関係は深まらず、そこに関係の悪循環が生じ、それがさらなる悪循環を生むことによって次々に複雑な問題が派生していくことになる（図2）。このようなアンビバレンスの強い状態にあると、A男には強いジレンマが生じてしまう。A男に認められた全身を固くして両手を広げて羽ばたくような常同行動は恐らくそのために生じた行動（動因的葛藤行動）であろう（図3）。

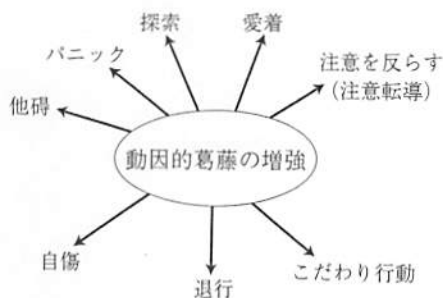


図3 動因的葛藤行動

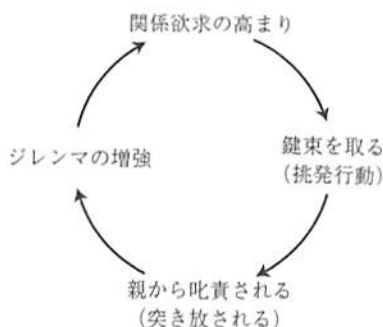


図4 挑発行動にみられる悪循環

VI 関係の悪循環としての気になる行動

A男の「挑発行動」は、自分に皆の関心を引きつけようとする行動であることは容易に見て取れるが、ここで大切なことは、このような注意喚起行動をなぜ「挑発行動」という形でA男は表現しなければならなかったかということである。SSPで端的に認められたようにA男には母親にかまってもらいたいという欲求があるにもかかわらず、正面きって相対するような関係になると回避的な反応が誘発されてしまうのである。よって、「挑発行動」は、筆者との話に集中していた母親の関心を自分の方に引きつけるとともに、母親からは叱責を受けることによって、突き放されるという結果をもたらす。A男は突き放されることによって、ジレンマは増強し、さらに注意喚起行動が誘発されるという悪循環がそこに生まれることになる。アンビバレンスの強いA男にとってはこのような悪循環(図4)こそ現在の二者関係を維持する上でもっとも自然で抵抗のないものになっていると思われるのである。

「挑発行動」と同様に、A男の「虚言」も注意喚起行動である。この行動を母子間のコミュニケーション構造から捉え直してみると、A男の〈うんち〉ということばの意図にはかまってはほしいという気持ちが強いことは容易に見て取れよう。しかし、母親はA男の〈うんち〉を字義的に受け止めて対応している。A男の〈うんち〉ということばの真の意味を文脈を通して捉えれば注意喚起行動で

あることがわかってくるが、A男の〈うんち〉の字義のみを取り上げてしまうことによってこのようなコミュニケーションのズレが母子間に生じてしまっている。このようなズレも両者間の悪循環をさらに強化する方向に作用しているのである。

VII 関係性を通じた発達支援 ——関係発達支援

発達障害の子どもと関与する人とのあいだに関わり合いの難しさがもたらされる最大の要因は、子どもとの関係欲求をめぐるアンビバレンスと、それと結びついて現れる養育者の側の子どもに関わるのが難しいという感じである。それゆえ、臨床の要となるのは、このアンビバレンスを緩和するように働きかけることと、養育者の側の負の感情および負の関わりの低減である。言い換えれば、両者のあいだに生まれた悪循環を断ち切ることである。アンビバレンスを緩和する働きかけの中心は、それまでの過干渉的なあるいは一方的な対応をできるだけ控え、子どもとの関心の向かうところを丁寧に受け止めることである。

この対応が功を奏すると、子どもとの関係欲求が前面に現れやすくなり、その結果、子どもの気持ちの動きを掴みやすくなる。子どもの気持ちが養育者に掴みやすくなることによって、養育者も子どもの気持ちを受け止めることが比較的容易になり、当初の関わりが難しいという感じが薄れ、好循環が生まれ始める。その中で子どもに少しずつ安心感が育まれていくようになると、子どもは外

界に対して好奇心を持ち始め、積極的に外界との関係を持ち始めるようになる。

子どものそうした肯定的な姿は養育者の喜びとなり、養育者の前向きな育児姿勢を強めて、子どもとのあいだで何かを共有しよう、子どもの気持ちに添おうという姿が増えてくる。こうして好循環が本格的に巡り始めるが、その中で、関係欲求の高まりとの関連で、子どもの側にさまざまな表現意欲が湧いてくる。このような好ましい関係が生まれることによって初めて、子どもの本来の発達の道が切り開かれていく。

以上のような理念に基づく支援をわれわれは「関係発達支援」と呼んでいる。

Ⅷ 具体的な援助の方向性について

紙幅の関係で事例のその後の経過については詳述できなかったが、事例にみられた両者の関係のねじれ（関係障害）には、乳児期からの愛着形成を困難にした母子の辛い体験が影を落としていることは疑う余地のないところである。しかし、そのことを直接セッションの中で取り上げていくことにはあくまで慎重でなくてはならない。まずは母親自身がセッションの中で子どもの気持ちの動きに気づくような契機が生まれてくることが先決である。母親自らが体感したことを通して、母子双方の心のありように目を向ける道が切り開かれていくことを目指すことが大切である。

Ⅸ おわりに

昨今、対人関係に問題をもつ発達障害の事例は増加の一途を辿り、改めて対人関係の問題そのものに立ち戻ろうとする動きが生まれつつある。そのような動向の中で、発達障害の療育方法のひとつとして、対人関係そのものの発達を促進しようとするプログラムまで開発されるようになってき

た。しかし、われわれが「関係発達臨床」あるいは「関係発達支援」とことさら主張しているのは、対人関係の発達を促進しようとする目的からではないことは、改めて強調しておかなければならない（小林, 2006）。われわれが発達理解や発達の支援になぜ「関係（性）」を取り上げなければならなかったかと言えば、本来人間は常に他者との関係の中で発達していくというある意味では至極当然の視点が、これまでの発達（障害）理解にほとんど反映されてこなかったという素朴な疑問からであった。われわれ関わる者の存在を抜きに子どもを理解することはできないということである。

本稿で具体的な事例を取り上げながら、関係性を通じた発達障害児の理解の一端を論じてきたが、その中で一貫して大切だと思われるのは、子どもや養育者、さらにはわれわれ自身がそこで何を感じ取りながら行動しているか、当事者の主体のありように焦点を当てるということである。われわれの目指す関係発達臨床は、行動次元の客観的に観察された対人関係を対象化して支援するものではなく、他者との関わり合いの中で自ら体感したことを通じた人間理解の試みであるということである。

文 献

- Ainsworth MDS, Blehar MC, Waters E et al (1978) *Patterns of Attachment: A psychological study of strange situations*. Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale.
- 小林隆児 (2000) 自閉症の関係障害臨床—母と子のあいだを治療する。ミネルヴァ書房。
- 小林隆児 (2006) ブックガイド スティーブン・E・ガットステイン著『RDI「対人関係発達指導法」—対人関係のパズルを解く発達支援プログラム』。そだちの科学, 7; 141-142.
- 小林隆児 (印刷中) 新奇場面法からみた幼児期自閉症の対人関係障害と関係発達支援。In: 教井みゆき, 遠藤利彦編: アタッチメントと臨床領域。ミネルヴァ書房。